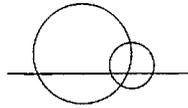


2007年度 豊橋市民大学トラム 愛知大学連携講座 (1回)



東亜同文書院の歩みと愛知大学

東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

【司会】 皆さんこんにちは。豊橋生涯学習市民大学トラム、愛知大学連携講座ということでお集まりいただきましてありがとうございます。私は豊橋市教育委員会社会教育課の伊藤と申します。よろしく願いいたします。

【加藤】 愛知大学の事務職員で企画広報課大学広報係というところにおります加藤と申します。よろしく願いいたします。

【司会】 今回の講座ですけれども50人の方にお申し込みいただきました。ありがとうございます。平成9年度から愛知大学さんと連携講座を始めまして、これで11回目になります。いつもありがとうございます。本年度は「近代史の中の東亜同文書院と愛知大学」ということで開催いたします。よろしく願いいたします。それでは講師のプロフィールの紹介を加藤さんをお願いいたします。

【加藤】 今ご紹介いただきましたように、今年の愛知大学連携講座はテーマを「近代史の中の東亜同文書院と愛知大学」と題しまして、愛知大学の前身校である東亜同文書院について学んでいただこうと思っております。東亜同文書院と言いますのは、日中提携の人材育成を目的として1901年に中国上海に創立された学校でございます。後に大学となり、5千人もの優秀な卒業生を輩出しましたが、敗戦により閉校。後に幻の名門校と呼ばれるようになります。この書院の歴史と精神を受け継いで創立されたのが、こちらの愛知大学でございます。愛知大学ではこの東亜同文書院

に関する研究を進めておまして、こちらの豊橋キャンパスに東亜同文書院大学記念センターを設置しております。このセンターは昨年度文部科学省からオープン・リサーチ・センターとして選定をされました。豊橋キャンパスに展示室を常設しております他、昨年から全国各地で、5か年計画で書院に関する貴重な資料や研究成果を展示紹介する展示会を開催しております。この連携講座は東亜同文書院大学記念センターのスタッフが、東亜同文書院と書院に集まる人々や歴史について紹介していくものです。よろしく願いいたします。

それでは本日の講師の紹介をさせていただきます。本日は第1回ということで、本学文学部教授で東亜同文書院記念センターのセンター長をしていただいております藤田佳久先生にご講演をいただきます。藤田先生は地理学をご専門としておられますけれども、同時に東亜同文書院大学記念センターのセンター長として書院に関わる研究を続けておられまして、書院に関する研究も著書も多数ございます。本日は「東亜同文書院の歩みと愛知大学」と題しまして、書院の成立・発展と背景、また書院で行なわれておりました中国研究などについてお話をいただけるかと思っております。それでは先生よろしく願いいたします。

【藤田】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました愛知大学の藤田と申します。どうぞよ



ろしくお願いいたします。今日は関心のおありになる方にお集まりいただきまして大変ありがとうございます。今もご紹介いただきましたように愛知大学の前身的な大学である東亜同文書院大学を記念した記念センターというのがこちらにございます。先ほどもご紹介がありましたように文科省からオープン・リサーチ・センターというプロジェクトに選定されまして、とりわけ去年からよりいっそう活発な活動をしております。そういう点で今度豊橋市とトラムを計画するというので、我々としては東亜同文書院を取り上げていただいたことを大変嬉しく思っております。今全体のまとめ役のセンター長をやっています。今日のお話は書院についての全体的なお話で、特に私が地理学をやっているせいもありまして、今から20年ぐらい前から、書院の方々が中国中を歩き回ったところに非常に関心を持ちました。その辺のお話も真中に入れながら少し時間を過ごさせていただきたいと思っております。

なお今回のリレー講義の中で、今記念センターの整備が進んでおりますのでそのうちの1回は記念センターの展示もご覧になっていただきます。従って今日お話しすること、あるいは後半次々いろいろな方がお話をされると思いますが、そういうお話も記念センターの現場で再確認していただいたら大変ありがたいと思っております。特にまた最近若い方にも関心を持っていただいて研究を進めつつありますので、そういうところでぜひ改めて、現場でそれらの成果もご確認ください。

テーマは一応「東亜同文書院の歩みと愛知大学」とさせていただきます。皆さん方のお手元にも研究報（ニュースター）をお配りいたしました。この中に昨年の秋以降、約半年間にわたる活動記録が載っております。現在この第2号を編集中です。特にこの中で、現在、本学の図書館の担当で文献調査のほうで非常に活発にやっていたいる成瀬さんの手を煩わせて、昨年横浜で開催された図書館総合展の中で書院の展示会を行

ないました。図書館展ですから全国からお客さんが約2万5千人ぐらい入ったということです。その一番の目玉として我々のブースを置かせていただきました。全国の方々に東亜同文書院を見ていただくいいチャンスになったと思っております。

今年は愛知大学の東京事務所が文科省の隣、37階建ての大きなビルの最上階に入ります。かつて東亜同文書院を運営していた東亜同文会が、戦後霞山会と名前を変えて9階建てのビルを所有していますが、それも取り壊されて37階建てのほうへ入るといので、10月の終わりのオープニングの際に、そちらでもまた展示をやる予定です。また、来年は福岡で開催する予定です。九州は東亜同文書院が上海にあった関係もあって、たくさんの方が書院に入学されています。各県から選抜2名ということですが、途中から私費で入る学生さんもいました。特に福岡県は大変な激戦であり、定員2人のところへ毎年50～60人の志願者が押しかけました。ですから県のほうも年によっては4人ほど合格を認めた時もあるようです。

再来年は、まだ決まっていませんが、関西地区の京都か大阪か神戸で実施したく考えており、最後の年は名古屋の車道校舎でやりたいと思います。それによって東亜同文書院に関して多くの方々にご理解いただける良い機会を作りたいと思っております。と言うのも、現在、戦後約60年が過ぎまして、書院もそうなのですが今や歴史的存在になっているところがあります。そういう点で例えば最近の書物を読みましても、満州とか、第2次大戦を含めてとりわけ戦前の昭和期あたりも歴史研究の対象になりつつあります。そういう中で東亜同文書院大学の内容も少し知っていただいたらいいんじゃないかというふうに考えております。

別の組織で文科省のCOEプログラムという、非常に大型のプロジェクトに、やはり愛知大学が中国研究のほうで選定されまして、私もその推進委員に入っています。世界の大学のうちヨーロッ

パの各大学と協定を結ぶため、その交渉に3～4年、毎年出かけました。訪問したのは錚々たる大学です。イギリスで言うとオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学のアジアアフリカ学部、経済学部であるLSE、それからオーストリアのウィーン大学、ドイツではハイデルベルグ大学（ドイツで一番古い大学。パリ大学から教授を引き抜いて作った）、ブレーメン大学、オランダではライデン大学、フランスではパリの高等科学院など、多くのところを回りました。そこで東亜同文書院と言うと皆さん知っている。これは大変助かりました。愛知大学の名は知られていないんですね、残念ながら。だけど東亜同文書院と言うとすぐ反応があります。その後継大学ということで愛知大学の名前を出しますとみんな快く応じて交渉の相手になってくれるんです。アメリカの場合もそうで、戦前から戦時中、戦後もそうですが、日本以外の世界では東亜同文書院およびその中国研究というのはいろんな意味で注目されていたということが言えると思います。ただ日本はどうかと言うと、戦後東西冷戦の狭間の中で中国に日本の大学があったんだから、それは植民地経営の大学ではなかったかとか、あるいは中国をスパイするための学校ではなかったかというようなイデオロギーによる見方とか、いろんな風聞が流されたりして、東亜同文書院に関する研究は、表向きの中からは消えてしまっていた時代が続きました。

世界の研究者はずいぶん東亜同文書院を中心に興味を持ち、その成果に関して多くの引用をしています。しかし日本の国内の中国研究というのは、東亜同文書院の多くの研究成果をそういう視点の中で省いてきたという時代がけっこうあったわけです。これは特に日本の中国研究者が戦後イデオロギー的に非常に固まっていた部分があり、中国の実態も調査せずに一方的な評価に片寄り、自由度がなかったためです。この背景にはやはり東西冷戦が色濃く影響していきました。従っ

てベルリンの壁が崩壊すると、以前から私が東亜同文書院に関して非常に興味を持ってやっていた研究成果をベースに、この東亜同文書院の存在がメディアで取り上げられるようになりました。当時、日本の各大手の新聞社は書院の特集記事あるいは連載記事を載せてくれました。中日や朝日のほか、日本経済新聞も5～6回載せてくれました。NHKも40～50分の特別番組を作ってくれたりして、その反響の大きさにびっくりしたことがあります。学内でもあまり東亜同文書院のことに興味のないスタッフが非常に多かった中で、少し書院というものの存在を見直そうかという動きへのきっかけになったのではないかと思います。これはまた同時に日本全体でもそういうことが言えるのではないかと思います。

中国自体も、戦後の人民中国の時代には東亜同文書院の存在そのものに関して観念的で、とりわけ江沢民政権の反日キャンペーンでは書院研究は制約的でした。しかし、最近では中国の研究者自身が東亜同文書院の研究成果に対して注目するようになりました。書院がまとめた研究成果を中国語で出すようにもなりました。そのぐらい中身を覗いてみれば多くの研究成果があり、改めて多くの人がびっくりしているところがあると思います。そういう点でこの東亜同文書院大学そのもの、およびその中国研究（だけではなく東南アジアの研究もかなりやっていますが）が、今後ますます多くの方々に関心を持たれるのではないかと思います。

あとでご説明しますが、とりわけ中国各地の調査報告というのは、清朝末期の時代から辛亥革命があって民国政府になったその時期には、国内が非常に不安定な時代でしたから、そういう地域調査を行なうというようなことはなかったんですね。ですから戦前の、20世紀前半の中国の事実、実態に基づいた資料というのは、基本的には東亜同文書院の記録がほとんどだと言えるでしょう。そういうわけで現代の中国を理解する上でも、基

本的な資料として東亜同文書院のいろんな研究成果がもう1回注目されてくる時期に、これから入っていくと思います。我々も多くの方々に注目していただいて、いろいろな方々と併せてこの研究が進めばいいと思っています。

第2次上海事変の時に東亜同文書院の校舎が戦火で中国兵に焼かれてしまい、隣の上海交通大学を7年ぐらい借用します。交通大学そのものは戦火を逃れて内陸やフランス租界のほうへ引っ越して、その空いたところを借用したわけですが、交通大学側にとってみれば日本の大学が突然自分達の大学を占領したということで、面白くないはずですが。しかしその留守に入り込んだ東亜同文書院はそれまですぐ隣にありましたから、お互いに仲良くやっていた学校なんです。書院の運動会に交通大学の学生が参加したり、学生同士の組織もいくつかできたりしていました。書院の交通大学使用はそういうことも全部消えてしまうぐらいの大きなできごとだったわけです。交通大学というのは鉄道の科学からスタートしましたから日本で言うと工業大学です。今日、改めて書院がどんな学校だったのかということ、イデオロギーではなく歴史的な事実を踏まえて、我々と交通大学とでお互いに共同研究しましょうと。これは画期的だと思いますが、そういう研究交流をこの7月に本学の当センター主催で行ないました。中国の方々も書院の研究に関心を持ち始めたということが言えると思います。

私個人は書院の研究を今から20年ほど前、誰もやらない時にやり始めました。私は地理学をやっていて、書院の中国地域調査には膨大な成果があるので、それを少しでも解明したら今の中国のベーシックな部分分かるんじゃないかということで研究を始めたわけです。最初はほとんど無視されていた研究でしたけれども、先ほど言いましたようにメディアが1990年頃、ベルリンの壁の崩壊直後に一斉に取り上げてくれて評価されるようになり、それでまた忙しくなったところがご

ざいます。今後さらに多くの研究者を得て、これが世界的に広がっていったらいいなと思っています。

先走った話をしますと書院の総合調査のような形になりますが、アメリカあたりで戦時中に、例えば敵国日本を知り研究をするということで日本に関する情報をたくさん集め、ミシガン大学などを拠点にしたことがあり、今日も続いています。日本は当時英語を使つてはいけないとか、野球も日本語でやるとか言って一方的にアメリカを拒絶していきますけれども、アメリカは日本の情報をたくさん集めて、その中からエリア・スタディ（地域研究）という新しい分野を誕生させるわけです。これが戦後の文化人類学等に発展していきませんが、書院の中国調査、あるいは東南アジア調査のやり方それよりもはるかに先行していたことができます。そういう点で書院の中国、東南アジアの「大旅行」調査は、戦時中から戦後の世界に大きな影響を与えたのではないかと思います。その辺はもう少しアメリカのミシガン大学あたりと共同研究が要るでしょう。前置きが長くなりました。今日は用意した資料がたくさんありますが、少し走りながらお話しできたらと思います。

初年度にこのような当オープン・リサーチ・センター年報を出ささせていただきました。これは先々文科省に出さなくてはならないものです。この中に昨年3月までの我々のいろいろな研究活動の成果が収まっており、センター等でご覧いただくことができます。これは当記念センターの図録です。今度のプロジェクトとは関係なく、その前にセンターの図録が要るということで作ったものです。中身は歴史的な資料がいっぱいです。特に今日は直接お話しできないのですけれども、次回以降でまたそのお話もあると思います。山田兄弟のことです。孫文の隣にこの山田兄弟のうち山田純三郎が写っている写真は定番です。こちらはお兄さんの良政という方です。津軽の出身で、南京に最初同文書院ができた時の先生なんですが、こ

の方は孫文を支持し、広東近くの惠州で蜂起した時それに参加して亡くなってしまいます。その遺志を継いで弟の純三郎さんが孫文を支えたわけです。実質的に純三郎さんは秘書をやっていたから多くの資料が集まり、純三郎さんの息子の順造さん（この方々は皆さん書院の卒業生です）がそれらを収集して孫文に関する博物館・展示館を作ろうと、多くの資料を整理しておられたんですけども、病気でそれがうまくいかず、本学に寄贈していただきました。そのコレクションも1つの大きなパートを占めております。

こんな経過で孫文関係のコレクションが当記念センターに所蔵されることになりました。このような孫文関係の資料は横浜と神戸に次いで全国では3番目です。いろいろ貴重な資料がたくさんございます。そういうものと、それから書院のことも含めまして、この図録の中に入っております。これも歴史的な資料そのものになると思っております。見学の時にこういうことも頭に入れてご覧になっていただくとありがたいと思います。この辺のところはあとのほうで担当される先生方がまたお話をされると思いますので、あまり深入りしないで今日は終わらせていただきます。

書院というところこういうキャンパス正面の写真が必ず出てくるわけですね。これはカラー版ですと煉瓦色の建物です。1901年に東亜同文書院がオープンしますが、その前の年に南京同文書院が開学します。しかし義和団の乱が起こりまして、それを逃れて上海へ移り、1901年に上海に東亜同文書院が設立されたわけです。最初はこういういい建物ではありませんでした。これは本学のリサーチ・アシスタントである石田君という方が研究をされて書いたものですが、最初の校舎はこんな建物で、都心からちょっと離れた一角に建物を借りてオープンしたものです。上海に行かれた方がおられると思いますが、ここがバンド風景です。昔の列強の遺産と言えますが、ヨーロッパあるいはアメリカの大きなビルが並んでいるところです。

最近はこの対岸にも大きなテレビ塔その他のビル群ができて開発が進んでおります。ここがフランス租界で、のちに日本が入ってきますとイギリスとの共同租界がこの辺にできます。書院が最初できたのは中心地南郊のこの辺です。先ほどの建物が焼けて今度は北郊に移ります。3度目にいよいよ本格的な校舎をというわけで、フランス租界の西の外側のほうの徐家匯に作ったわけです。これがその校舎です。これも石田君による作品ですが、最初の校舎はこの程度しかなく、このぐらいの規模でささやかにスタートしたようです。

この書院の立役者と言いますか関わった方々をみますと、この写真の真中が荒尾精という人です。この方は愛知県出身ですけれども、明治の軍人になりまして、熊本の鎮台へ行っている時に中国との接点ができました。明治10年代のことです。中国へ行って、今まで知らなかった中国を初めて肌身で知ったのです。それまでの日本人の中国と言うと、漢詩・漢文ぐらいでしか知らなかったわけです。そこに書かれているのは南画の世界も含めて非常にきれいな中国でして、四書五経など多くの古典で描かれる中国とともに、道徳感に溢れるすばらしい国というイメージが強かったのです。ただ漢詩・漢文や南画などはみな中国のインテリ層の作品でして、インテリの人達が自分の才能をああいう表現の中に見出して示していくという世界でしたから、漢詩、漢文の描いた世界はある種の虚構でもあったわけです。南画もそうです。ああいう世界の中には、例えば大多数を占める農民が農作業をやっているような光景を正面に取り上げるという作品は出てきませんし、農民を歌い込んだような漢詩も一切出てきません。そういう点では日本人の中国観というのはかなり一方的な中国観だったわけですが、明治に入ってから少しずつ中国へ行く人も出てきて、中国の実態を初めて知っていきます。そんな中で荒尾精はいろんな意味で中国に関心を持ち、中国の実態を知ろうとしたのです。そして彼がリーダー役になって、日

本から渡って来た若い日本人達を集めて「中国の各地へ行っていろんな物産品などを見てこい、そういうのを情報として持ってこい」と言って派遣するわけです。この図はその一環を示したのですが、全貌が分かったわけではありません。行ったきり帰ってこないとか、途中で亡くなってしまったとか、そういうケースも非常に多かったのです。そのことから荒尾は指導体制や組織が失敗したと思っているわけです。それで後に日清貿易研究所（書院の前身のような学校）の設立に思い至っていきます。

荒尾自身は中国の中央部の漢口に本屋さんを開きます。スポンサーは岸田吟香という、日本人で最初の国際商人とっていい人です。ローマ字のヘボン式というのをお聞きになったことがあると思いますが、そのヘボンから横浜で目薬の作り方を教えてもらい、辞書を作る時にもいろいろ教えてもらったりして、上海へ行って事業家として大成功します。これが若い時の岸田吟香、これが晩年の岸田吟香の写真です。お子さんが岸田劉生と言って、皆さんがよく見るであろうこういう絵を描かれた方です。そのお弟子さんが豊橋の豊川堂の高須さんで、その方が、愛大のロゴ（マーク）を作られた。そういう点で愛知大学は岸田と荒尾との関係があったと思うところです。

こうして日清貿易を中心にして荒尾の調査に基づき、のちに書院の院長になる根津一の手により『清国通商綜覧』という、今で言う中国の商業地理というべき本が書かれ、日本で初めて中国の実態を示した本が出されました。中国の多くの商品等もその中に入れてあります。当時の日本政府はアメリカとかヨーロッパにばかり目がいったけれども、隣の中国にはこんなにすばらしいものもある、だからもっと率先して中国と貿易をするべきだという提案をしていくわけです。ここに示した銅製品でもこういうものが中国にありますよと。日本に中国の実態を知らしめた役割をした人です。それが日清貿易研究所を作るきっかけに

なります。その時に荒尾精の親しい友人根津一（最初の院長）にそれをまとめさせたという経過があります。こうして日清貿易研究所は1890年に上海に設立されますが、日清戦争が始まり、この学校は開校して5年目に日本へ引揚げ閉校になってしまいます。しかし、この日清戦争というきっかけによって日本で初めてアジアとの接点ができ、アジア全体を見ようという動きが出てきます。それがこの東亜会とか同文会の誕生です。その他にもいろいろ設立された団体があって、皆さんもお聞きになったことのある明治の論客の錚々たるメンバーもたくさん加わるのですが、その中の東亜会と同文会が合体して、同文会のメンバーの中にいた近衛篤磨がリーダーになり、東亜同文会を設立したわけです。

若き日の近衛篤磨はこんな感じの顔です。この方は貴族院の議長をやられた方ですが、明治32年にヨーロッパから中国経由で洋行帰りをしています。長いあいだ各地を見てきて見聞を広めたあと、最後に中国にも寄ったわけです。この人は当時の君子的スーパースターで、ヨーロッパに行っても中国に行っても、各界名士の皆さん近衛のところへ集まってきてご挨拶をしたり、いろんな意見交換をします。この人は日記を残してしまっていて、それを見ますと人にばかり会っていることがわかります。もちろんあっちこっちに行っていますけれども、我々ですとここまで行ったらあそこを見たらいいのにとと思うようなことが多いんですが、この方はとにかく人と面接するだけでも非常に忙しい。そんな時に日本の国からもいろいろな手紙・情報が届きます。その中に東亜同文書院設立の話が少し出てきます。

「東亜同文会としてはあなたの留守のあいだにいろんな検討をしました。南京に学校を作りたいという話が今進んでいます。その場合学校をどういうふうにして作ったらいいかを本部としては考えました」。南京の町は真中が少し低くて両側に山があるんですね。山の上に本願寺がもう進出し

ていて、南京学堂という学校を持っている。この南京学堂を書院として使わせてもらったらいいんじゃないかと考えたけれども、本願寺がうんと言わない。「そこで我々は別に1校新しい学校を作ったほうがいいんじゃないかと考えている。これを作るについては外務大臣も大賛成で、日本の中でも支持してもらえている。お金もかかるけれどもとりあえずうまくいくのではないか」というようなことが書かれていた手紙を上海に着いた時に受け取るんですね。

次に南京へ近衛篤磨が出かけた時に地元江蘇省（愛知県は江蘇省と友好提携をしています）の総督（今で言うと知事）にその話をした。「余は東亜同文会の趣旨を述べ、南京にも学校を設けたい。そのことが非常に多くの便宜を日中間に与えるんじゃないかということで意見交換をしたら、知事は大賛成であった」ということで早速現地で近衛篤磨が、東京からの手紙をベースにして話をした、というようなことが背景にあって、東亜同文会を中心にして東亜同文書院構想がまとまっています。

南京の他に広東にも支持者がいたんですが、最終的には南京に作りましょうということで1900年にできた。それが南京同文書院です。その時の近衛篤磨の一番の考え方は、清国を保全し、清国の力をアップさせ、アジアをもっと振興させることです。当時はヨーロッパ等の列強がどんどん中国やアジアへ進出していましたし、日本もその圧迫の中にいましたから、日中提携をすることによって全体としてパワーアップしたい。しかしそのためには戦争というようなことではなく、ベースの部分での教育・文化事業が一番重要だ。お互いの文化レベルを確認し合いながらレベルアップしていくことが重要だということで、東亜会側の系統にはかなりイデオロギッシュな人達もいたんですが、東亜同文会としては教育・文化事業に徹するというので、その一環として学校事業が具体化していったわけです。

そこでまず東京の目黒に東京同文書院という中国人留学生の受け入れ学校を作ります。ここは中国の留学生をたくさん受け入れました。さらに今度は朝鮮半島。当時の朝鮮半島も李朝の政権下にあって非常に階層制のきつい国で、一般庶民は教育が受けられませんでしたから、そういう子供達に教育を受けさせてレベルアップをしようということで学校を建てるわけです。そんな時に津軽出身の笹森儀助という方もその校長になっています。この方は南東探検、要するに南洋諸島の調査研究をやった人ですが、雪国の人が雪の降らない地域へ行って研究したというのはやっぱり好奇心だったろうと思います。最初は校長になるんですが、やがて琉球（沖縄）の調査に入ってさらに南のほうへ行くんです。こんな方も東亜同文会の学校との関係があるんですね。面白いなと思います。これがなぜ分かったかと言うと、青森県の新聞社東奥日報が、郷土の生んだ笹森儀助の行跡、彼のたどったルートをずっと、1週間に1回ずつ新聞に載せていまして、その中で東亜同文書院・東亜同文会の存在とぶつかったんですね。そこで執筆中の記者が愛知大学の記念センターに来られて、東亜同文書院の話をいろいろ聞かれたことがありました。その時に我々も笹森儀助がこの校長だったと知って、ちょっと新鮮な驚きを感じました。

そのあと前に述べましたように南京に同文書院を作ります。ここには南京のことが書いてないですけれども、それが東亜同文書院（のちに大学）ですね。途中で中華学生部に中国の学生も入れる。それからあと北のほうでは天津に中日学院、漢口では江漢中学校、そしてずっと後になりますと北京の経済専門学校とか工業専門学校とか、東亜工業専門学校とかを一部吸収合併しながら学校経営を中心に展開していったわけです。もちろんメインは東亜同文書院です。そういう経過があったわけです。

外国の地に学校を作ったなんていうのは世界でも例を見ないんですね。イギリスもかつて7つの



海を制したと言われますけれども、イギリスが海外の植民地の中に自国の本格的な学校を作ったということはありません。クリスチャン系の学校が少しあっちこっちにできたということはあるわけですが、それはそれぞれのクリスチャンの団体で作った学校であって、こういう形で堂々と他の国に学校を作ったという例は世界でもほとんどないですね。今だったらそういうことはあり得るかなと思いますが、100年前にそういう企画を持って学校を作ったということがなかなか独創的で面白い。日中間の提携をもって欧米諸国に当たろうという背景がベースにあって、台湾もそうですが教育レベルが低かったので、そういうところの教育水準を上げないとこの地域の国力はアップしないということを見抜いた発想だったと思います。

こうして1901年にできあがった学校ですが、最初の頃のスタッフおよび科目を見ていただきますと、語学・商学系、特に中国語は徹底して行なわれていたことがわかります。例えば中国人の先生と日本人の先生が2人、教室に配属され、両方の先生でより徹底的に中国語を指導しました。中国語が話せないと中国との取引ができません。中国の商慣習は大変ややこしくて日本人の手に負えるものではないという認識があったためです。これを徹底的に勉強しないとだめだということで、どうしてもこの調査・研究をさらに進める必要があった。その手段としての中国語ですが、それ自体を目的として中国語の研究に入ってってしまう人もいました。戦後引き揚げてきて日本の大学の中国語の先生になった方々もたくさんおられます。戦後スパイ学校だったとかいろいろ言われましたけれども、そういうような科目はもちろんありません。言ってみれば一種のビジネス・スクールだというふうに私は考えております。

と言っても東亜同文会は民間団体の組織でお金がなかったんですね。理想は高いけれども現実にはきびしい。そこで根津院長の発案で、全国各県

の知事を訪問し、各県に共通の入学条件を提供したわけです。お宅の県の学生さんを育てたい。ついでにはお金はあなたの県で持ってくれないか。各県知事を回って、2人ずつ県費生を入れましょうということで学生を集めた。最初は、お金のない県は1人だけとか、授業料だけとか、生活費は自分でやってくれとか、後になるとだいたい週1ドルの小遣いまで貰えるというふうになってきました。昨年7月に、書院を出て今101歳になられた安澤隆雄さんという25期の方に当時のお話を聞きました。あの方は新潟出身でやはり県費生に選ばれたんですけども、新潟県としては当時新潟港を整備する必要があって、安澤さんのために出す予定だったお金が出せなくなった。だから自費で行ったそうです。そういう人も時々おられます。今から10年あまり前には書院出身の存命の方が1,400人ぐらいおられたんですけども、今はもう半分に減っています。これはその方々がどの県の出身かをお聞きして、回答のあった方々の県別分布図を示したものです。前半の時期はまだばらついています。私費生もOKになってきますと今度は東京とか大阪とかの都市部、また愛知県も多いですが、そういう都市部から多くの方が入ってきます。もちろん各県とも2人ずつは入れたわけですが、

1901年に入った方が1期生で、34年に入った方は34期生ということになります。入学時にどんな夢を持って入ったのかというアンケートをしたら、中国で働きたい、骨を埋めたい、あるいは両国のために働きたいとか、中国の人のためにとか、中国を見たい、学びたい、中国語を学びたい。そういった目的意識がかなりあったようです。漠然と中国へ行ったという人もいますけれども。当時日本の国力・経済水準もそんなに高くありませんでした。高等教育あるいは中等教育を受けようとするとお金が必要で、農業国でしたから地主の息子さんあたりでないとなかなか帝大までは行けないとか、大学まで行けないという状況下

にありました。先生になる師範学校は授業料が只でしたけれども、実業界では授業料が不要な学校は書院だけでした。従ってかなり優秀な方々がたくさん応募されたわけです。ましてや県で選抜が行なわれますから、かなり優れた方達が集まったということが言えます。

いよいよみんな書院へ入ってくるわけですが、書院としてはお金がありませんでした。「中国へ来たんだからもっと中国を知りたい」という学生達の声に対して、学校は中国国内の修学旅行で応えたわけです。修学旅行が日本の中で始まるのと時代的には重なるところがありますけれども。例えば1期生の場合には上海から山東半島、北京あたりまで船で行っています。修学旅行の実態はよく分からなかったんですが、1つだけあなたが書いたか分からないけれどもこういう記録が残っています。学生諸君はみんなプライドがあったらしく、いろんなところで「ここはつまらん」とか「ここはこうあるべきだ」とか、文句もたくさん書いてあります。どこへ行ってどんなことをやったか、非常によく分かります。学校側も学生の人達の希望を聞き入れたいのにお金がないから頭を痛め、根津院長は日本へ行って金策をしました。自らお金を集めに行ったのですから院長さんも大変だったわけです。

ちょうどその頃、日英同盟が結ばれました。結ばれて100年目の時に私はイギリスにいたことがありますけれども、イギリス人の方はほとんど無関心でした。日本もやはり関心があったとは言えませんが、ちょっと本が出たりしました。イギリスとしては日本との同盟はそんなに重要視していなかったのかも知れません。イギリス側は、中国西部のほうに新疆ウイグル自治区というのがあって、ここにロシアの勢力がどんどん入り込んできているとみとめました。イギリスとしては閉鎖されたチベットその他があって、インドは植民地だけれどもここを突き抜けて北のほうへ入るわけにいかない。だから日英同盟が結ばれたことを踏まえて日本政府にその調査をやってもらいたいとい

う要望があった。日本政府はそう言われてもこっちに何の情報手段も持っていません。確かに日清戦争はあったと言うものの、日清戦争の戦場は沿岸部ぐらいの範囲であって、中国の人でも日清戦争があったかどうかとも知らないような人がたくさんいたぐらいです。そういうわけで西域の情報なんてほとんど分からない。そう言えば根津院長がやっている東亜同文書院が上海にあるから相談してみようということで、まあ根津さんもきっと困ったと思うんですけども、「じゃあ何とかやってみましょうか」みたいなことだったんでしょうか。開学の直後で書院の存在感を示す良いチャンスだと思ったのかも知れません。卒業したばかりの2期生5人を呼んで、「お前達に行ってほしい」と要請したのです。当時根津院長は学生達にとって神様みたいな人でしたから、「それなら」と、5人の人達がバラバラに各ルートをたどって西域や蒙古へ入った。

これが大変ですね、西域まで入るわけですから。行って1年、帰って1年、合計2年です。内蒙古から外蒙古へ入った人達は、一番奥のウリヤスタイというところ。ここはウランバートルで、この西方はちょうど今、朝青龍が保養しているところじゃないでしょうか。そのあたりまで歩いて入ったのです。それからシルクロード。日本では有名になりましたけれども、このルートを通ってロシア国境まで。それからコプトという北のほう、アルタイ山脈のほうまで入った。ということは日本人初の踏査でしょう。5人が別々のコースを通過して各地へ入ったのです。みんな日記を書いたと思うんですが、残っているのはそのうちの波多野養作1人だけです。克明な日記が残っています。

書院の校舎の裏側に墓地がありました。中国の墓地は土盛りなんです、その墓地の上に乗かって2期生が記念写真を撮ったのが残っています。みんな後ろに髪を垂らした辮髪です。そんな中で帽子を唯一被っているのが波多野養作です。当時の写真ではまっすぐ前を見ないであらぬほう

を向いている人が多い。坂本龍馬の写真もこんなふうはどこかの方向を向いていますね。空の彼方を見ていると言うか、大志を夢見ていたのかも知れません。波多野もそうですが。八幡製鉄が八幡へ進出する前の漁村の生まれで、地元の中学校で柔道をやっていました。だからきっと書院でも柔道をやっていて、お前は身体が良さそうだからと選ばれたのかも知れません。この人が記録を残したのです。道中の道路はもちろん良くありません。馬車に乗ったこともあります。ガタガタ道だからすぐ痔になってしまう。途中でマラリアにかかる。戦前の中国は揚子江沿いでもマラリア蚊がいたんです。お尻をちょっと上げて刺す蚊が媒介します。東南アジアなんかに行った時は注意しなさいと言われると思いますが、戦前は隣の中国まにもいたわけ。日本でも太平洋戦争時まで沖縄にはマラリア蚊がいましたね。当然、波多野も熱が出て1週間記録がなくなります。熱にうなされながら旅行をしたんですから大したもの。苦しくて死にそうになった時、現地に入っていたアメリカやヨーロッパの宣教師の人達に救われるんです。こんな奥地にまで宣教師がいるというので、学生達はみんなびっくりしたというのが記されています。

この人は途中いろいろ記録をとっていて、各町別の人口とか、どこの国の人がいるのかとか、そういうのも細かく観察して記録しています。大したことだと思います。そういうデータを元にして分布を示すとこんな図ができます。ちょうどこれは河西回廊の範囲ですね。陝西省のさらに奥の哈密という、哈密瓜で有名なところ。清朝時代の王様が大変おいしい瓜を食べた。「これはどこの産か」と言ったら「哈密」だと答えてその後哈密瓜として有名になったという話です。私もタカラマカン砂漠の調査が10年間ぐらありまして、帰りに現地の人達から、「これを日本人に食べさせる。おいしいから」というので哈密瓜を2つ持たされたことがありました。こういうものはチェッ

クなしでは日本へ持ち込めないのですが、どうしても持っていけというものですから風呂敷に包んだりして名古屋空港へ着いたんですけども、ポンプ匂いがして、税関から「お持ちでしょう」なんて言われ、1つ出したら「もう1つないですか」。結局2つ取られちゃったんです。おいしそうな瓜はあのあとどうなったのかと非常に気になったことがありました。ほんとはいけないことだったんですけどね。そういうような生産物も含めいろんな記録を元に情報を整理できます。細かい話は省きますが、これは毎日の天気です。ルート別の天気・気候マップを作ってみました。1枚にまとめちゃったんですけど、当時の様子がよく分かります。

そしてちょうどその頃はヨーロッパの列強諸国が、最後の探検地として次々に中央アジアへ殺到した時代です。多くの仏像・壁画が削り取られて、ロシアとかスウェーデンとかノルウェーとかドイツとかイギリスとかフランスとかイタリアとかに持っていかれました。日本では20歳ちょっとの大谷光瑞がロンドンに留学していて、「まさにこれは仏教遺跡の調査だ。ヨーロッパ人に仏教が分かるわけがない。おれ達が行かないでどうする」というわけで、日本から来ていた留学生何人かを束ねて、強引にシベリア鉄道で行けるところまで行って、南下して西域方面へ入ったのです。ところが入った途端に本人自身は本願寺のほうから「親が危ないから至急帰れ」と言われてインドへ南下して、そのまま帰国してしまっています。あとに残された2人（堀という人ともう1人）が初めて今のシルクロードを歩いて北京へたどりつくわけです。書院の人らが行く1年前の話です。大谷グループの2人は研究の準備も発掘の準備もほとんどできてないのに行っちゃったわけです。それで旅行しながら石仏などを見て帰ってきた。ところが書院の人達はさっきのデータにもありますが初めてそこへ調査をしに入った。だから日本人の西域調査第1号は書院の人達なんですね。これ

はもっと評価されていいことだと思いますし、そういう情報をおもてに出してもいいんじゃないかなと思います。

なお大谷光瑞の一行はその後第2次、第3次と少しずつ本格化して続けるわけですが、最後に本願寺のほうから「もう金がない。いい加減にせい」と言われて、ストップします。当時の膨大な資料を誰もきちんと保管して分析するということをしなかったために、大谷光瑞は自分の持ち帰ったものを日本、京城（今のソウル）、台湾と、いろんなどころへ分けて置かざるを得なかったのです。そのまま戦後になってしまったものですから、西城から持ってきたものは今でもあっちこちに残っているわけです。1つにまとまっていたらもう少しまとまった研究になると思うんですが、もったいないことをしたわけですね。現地から遺物を持ってきてしまったということ自体は問題です。現地へ行きますと、今流に言うところ「ここから中国の文化遺産を盗んでいった盗賊達」と、世界中の有名な探検家達は一大盗賊団だ、みたいな表現で博物館に名前が挙げられていて、その中の1つに大谷光瑞の名前が出ていました。西欧諸国のほうへ持っていかれたのはその後戦争でみんな、もったいないことに破壊されてしまっています。現場にあったらよかったなと思うんです。ただ、大谷光瑞のものはあるんですが分散してしまって全貌は分からない。大谷光瑞は失望して、今度は南洋のほうへ渡って農園経営者になり、仕事を変えていくわけです。ちょうどそういう時代的背景の中で西域が注目されたわけです。日本で最初に現地を調査したのは書院の学生5人です。彼等が関わってきた報告書をベースにするとこの地域の研究成果が分かるとともに当時の西域の様子も分かると思います。

そういうこともあって外務省がお礼に書院へ3万円をくれたんです。全部の学生が中国旅行をするのに3年分ぐらいあるだろうというので、書院はそこで初めて大旅行というものを、学生の希

望に沿って始めました。学生が行きたいところへ行かせ、テーマも自由に選ばせました。東南アジアのほうもそうですが、こういうでかいビザを中国政府からもらってです。これも当センターに展示してありますので見ていただくといいですね。

そういうわけで各地へ出かけていきます。総コース数は約700、そのうちいくつかのコースを簡単にご紹介します。これは上海から出て北のほうへ行ったコースです。学生達の目的地は1つなんですけれども、せっかくですから遠回りをしてあっちこち見て、帰りも遠回りして帰ってくる。だから長い人は1年いたという話です。半年ぐらいの人もいます。多くは4か月から5か月です。5月ぐらいからスタートして秋口に帰ってくる。その後は3か月ぐらいが多くなりますが。ほとんど農村部を歩きました。この行き先は当時の満州です。さらにソ連へ入りたいとビザ申請をするのですけれども引き受けてくれない。当時はソ連もそれどころじゃなかったんでしょうけど。こんな感じで各地へ足を伸ばす。これは南のほうへ船で沿岸沿いに入って、今のベトナム（当時はフランス領）へ出かけています。「フランス人が非常にいばっている」というようなことを書いています。しかし「東南アジアの調査をするには、後輩達はもっとフランス語を勉強せよ」とも書いてありましたね。ここから揚子江（今の長江）の中流部へ出て帰ってくるコースです。さらに一部の学生は解散後北のほうへ向かっています。現地の地図は当時ほとんどありませんでしたから、自分達で歩幅を計って実測地図を作ったりしています。

これは省の境目で書院生がたたずんでいる写真です。昔の学生諸君はちょっとロマンチストが多いのか、こういう写真がけっこうたくさんあります。これは潼関の写真です。「箱根の山は～函谷関」とうたわれたところ。非常に荒れているのが分かります。今と比較すると貴重な写真だと思います。各地に行く時、民国政府になってからは軍閥が各地域を支配しているのですが、その軍閥に



も必ず会っている。多くの軍閥は日本に留学していたインテリの人達で、軍閥という名前ですと大盗賊団の親分みたいな感じですが、実際はインテリの人だったわけです。黄河をこんな筏で下ったり、馬で草原を走ったり、いろいろな写真が残っています。これは船の中で過ごしている光景です。

一方東南アジアにもこういう感じでけっこう足を伸ばしています。なかなかの大冒険旅行です。今でもそう簡単にはできそうにないコースです。これなんかも大旅行です。上海からスタートしてセレベスとかブルネオとかに寄りながらインドネシアのジャワ島、スマトラ島を横断してマレーシア、シンガポールから船で帰ってくる。昨年7月にご講演いただいた25期生の安澤さんは、本当は雲南まで行って、さらに重慶へ行って帰ってくる予定だったのですが、昆明で「途中には大盗賊団が集結しているから行くな」と言われ困ってしまいます。しょうがないので雲南の昆明でちょうどチベットから来ていた隊商の親分と交渉したら、「何月何日ここで待っとれ。連れていくから」と言われて、チベットへ行けると喜んだけれども、その約束の時間にいくら待っても相手が来ない。騙されてしまったのか振られてしまったのか。そこであらためて「どうしよう」ということで、幾重にも谷がある雲南奥地を越えて、ビルマへ出てそこから帰ってくるルートに変更決定したのです。後に援蒋ルートと言って蒋介石を援助するアメリカ軍のルートがここにできますが、その前の事です。

安澤さんは南画で大成した方でもあります。若い時から絵心があってこんな少数民族の絵などをいろいろ描かれています。これは阿片の道具です。一方、当時の東南アジアの様子です。一般的に言うと非常に親日的だったわけです。日本人が各地の隅々にまでいて、地域の人達の信用を得ていました。自動車も普及していて、あっという間に目的地へ着いてしまう。やっぱり植民地だったんですね。中国を旅行するのは大違いで、日程が余ってしまうぐらいだったと記しています。同

時に「いろいろな言葉を勉強しろ」というようなことを後輩達へ一生懸命書いています。これは安南王朝の宮殿の写真です。この近くに日本橋という、鎖国の前の室町時代に日本人が行って町を作った時の橋が今でも残っています。

ところが満州事変が起こって、中国政府は2年間書院へのビザの発給をストップします。書院の学生達はもっと中国奥地のほうに行く予定だったのが、満州しか行けなくなってしまったのです。しかしおかげで満州の記録が残ったのです。今私も満州「大旅行」を中心とした編集を一生懸命やっていますけれども、非常に貴重な記録がたくさん残ったわけです。これがその時の記録写真です。大興安嶺も小興安嶺も、虎が出るのに歩いて横断しております。日章旗を掲げています。ナショナリズムではなく、こういうのを掲げていないと危なくてしょうがないという意味で掲げたのだと卒業生から聞いたことがあります。これは盗賊団ではありません、軍閥の親分達との写真です。彼らの文字は大変きれいです。だからインテリなんです。呉佩孚とか曹錕とかいうのは、当時一世を風靡した軍閥のトップです。

彼等が出版する旅行記には必ずこういうような著名人（これは犬養毅です）の揮毫が掲載されています。孫文もそうです。そういう著名な人達の揮毫がたくさん載せられている。調査もコース別からテーマ別へ次第に変わっていきます。こういう変化はアカデミックに指向していく1つの大きなきっかけになっていたと思います。ただ日中戦争が始まりますと次第に大旅行が中途半端になってしまいます。奥地へはなかなか行けない。1930年代の終わりのほうに四川まで行った班も例外的にありますけれども。限られた範囲しか行けなくなってしまいます。最後にはさらに海岸線寄りしか行けなくなります。せっかく大学に昇格するんですが、やがて最後の数年は実質的に旅行ができなくなります。

3万円のお金で5期生から行けるようになっ

て、これは非常にいいということで3年間で終わらずに学校側も寄付を集めてずっと継続し、全部で700コースぐらいに達します。その途中のコース図を示しますと、これは5期生から23期生までの中国（満州は省いてあります）だけに関して示したものです。こんなふうにはたくさんのコースのラインが引けます。とにかく最初の頃は、日本人が行ったことのないところをみんなで選んで行くということでしたから、珍しいコースをたくさん行っているわけです。どうやってコースを選んだのかと、先ほどの卒業生に対するアンケートで聞いたんですけど、テーマによるとか行きたいところを選んだとか、かなり自由に選んでいた様子がお分かりいただけたと思います。そういう中でいろいろ成果が集約されていったわけです。

これは就職地です。卒業生がどこへ就職したか。天津・北京・ハルビン・奉天・長安（今のチャンアン）。ほとんどが経済活動の活発なところの商社を中心に領事館、ジャーナリズムなど幅広く就職しております。

ところで、そういう調査旅行の成果が実際には書院による中国研究を進めたわけで、最初に申し上げた荒尾精と根津一が編集した「清国通商綜覧」、これはプリントに載せておきましたが、そのあと2期生5名が先ほどの西域調査に行き大成功しました。しかし当の5人は大変でした。それから調査旅行が制度化され、次第にビジネス・スクールからアカデミックスクールのほうへ指向し、これが大学へ昇格するきっかけになっていったと思います。中国語を教えるにあたって実用の教材を丸暗記させたということですが、やっぱり教科書が要る。それには一定の原理が要るということで、「華語萃編」という中国語の教科書が作られたり、学生達の成果をベースにして書院の先生達もかなり調査をやります。最初は全部学生達の手で執筆された「支那経済全書」、これは中国のエンサイクロペディアというべきものでしょうか、中国の百科事典みたいな本が出ます。全12巻。

省別の地誌が18巻。それから戦争が激しくなった頃もう1回全18巻を予定しますが、9巻まで行って戦争が終わって中断してしまうわけです。その他機関誌として「支那研究」とか講座本とか、こういう類の調査報告がたくさん出ます。調査旅行の規模が拡大していく中で報告書の性格もアカデミーな方向へ、経済・商業だけではなく、地理はもちろんです、教育・文化・歴史・民俗など調査対象が広がります。指導したのが経済地理学の先生なんです。馬場敏太郎という滋賀県出身の方です。こういう経過でアカデミーのほうへ指向していったわけです。このような研究誌が今で言うと学内の研究紀要みたいなものでしょうか。中国、さらにのちには満州の人名辞典であるとか、年鑑類が次々と出版されました。

こういう成果をデータとして読み込みますといろいろな分析ができるんですね。これなどは天気図です。これもいろんな産物やいろんな貨幣の分布を示したものです。当時中国は統一貨幣ではありませんでしたから様々な貨幣がありました。ある年だけの記録の中で拾いますとこんなに色々な貨幣が使われていたことが分かります。同じ種類の貨幣のところを○で囲みますとこんなふうになります。1つの経済圏がそこに浮かび上がります。おそらく伝統的な中国の経済圏を表していると言っていいでしょう。一方、これは言葉ですね。方言なんですけど何語を話しているか。その言葉を同じように囲みますとこんな形で浮かび上がります。これは1種の文化圏を示します。では経済圏と文化圏は同じなのか違っていいのか、先ほどの経済圏をダブらせると、こんなふうに両者がかなりダブります。中国の基本的な地域構造と言いますか地域のまとまりを、彼等のデータからこういうふうに表示することができます。中央政府がいろいろ命令を出しても地方はちっとも聞かないというのがよくニュースに流れますが、それはやっぱりこういう強固な伝統的な地域のまとまりが今でも生きているからだと理解できます。そういう

流れの中で言いますと今の中国の地域構造と変わらないといえます。

これは学生達が気づいた阿片の栽培地を示したものです。だいたい北西部・内陸の畑作地帯が多い。それから旅行コースに記された強盗団である土匪の分布図を作成したものです。また、これは1925年に排日運動があった時の排日運動を分布図として作成したものです。昨年反日運動がありましたけれども、戦前もこういう段階のものがいくつもあり、これのきっかけになる事件もいろいろありました。今日はちょっとお話しできませんけれども。これは先ほどの軍閥が領域を拡大し合い、潰し合ったある時点での領域を作図して示しています。

こういうのを見ていきますと、ちょうど書院の人達が研究した1930年頃にかけて資本主義的な芽生えがありました。そのあとは軍閥間の戦争や蒋介石の北伐戦争、国民党と共産党との戦争、そして日中戦争による混乱期に入り、戦後の人民中国でも文化大革命があって、80年に文化大革命が終わりようやく経済開放が進んでいくわけで、1930年頃と1980年以降へ接合することができると考えられます。つまり、その時に接合できるのはこの図のこの断面、これを1980年のこの断面へ持っていくと、現代中国へつながるわけです。今外国資本も入っていますが、戦前でも同じでした。そういう点で言いますと現在の中国を理解する上での大きな原則は変わっていない。ここを理解するのが重要だろうということになります。

愛知大学の話をする時間がなくなってしまいましたが、今日おられる越知さん達が中心になりまして『愛知大学創成期の群像』というブックレットを作っていただきました。この中で書院最後の学長本間先生が、引き揚げてきた日本でも東亜同文書院大学として作りたかったんですけども、当時のGHQは「中国にあった名前は一切使うな」ということで、「愛知大学」となり、書院時代の中国研究所というのも使えず、「国際問題研究所」

というふうになりました。愛知大学の名前も「知を愛する」というのがちょうど都合がいいということもあったと思うんですが、こうして東亜同文書院大学ではなく愛知大学という名前でスタートすることになったのです。戦後はGHQも厳しかったし、中国との関係もシビアでしたから、少しでも中国と関係のあるものは全部カットされたのです。そういう中で本間先生は私財も投入するなど非常に苦勞して愛知大学を作られたわけです。このあたりの事情はセンターが出しているブックレットの中にございますので、興味のある方はお求めいただけたらと思います。

当時どんな先生がおられたかと言うと、非常に著名な先生方がおられました。途中からGHQが、「書院の先生と学生だけではなく、大陸にいた他の大学の人も入れなさい」というわけで、京城帝大とか台北帝大とか、ハルピン学院とか、いろんな大学の教員や学生も入ってきました。言ってみれば愛知大学は東亜同文書院を中心にしながら、大陸諸大学の引揚げ受入れ校という形で展開したのです。例えば私なんかのおります文学部は、京城帝大から来た先生方が主力で作られました。そういうことで愛知大学は今も書院との関わりがあります。書院時代、中国で中日大辞典を作るために14万枚のカードを作っていたのを、放棄して帰らざるを得なかったのですが、本間学長の返還の願いが聞き届けられ、戦後郭沫若が日本へ返してくれ、その上には周恩来がいました。よって愛知大学は周恩来首相の出身大学である天津の南開大学と初めて大学間の協定を結びました。日本の大学と中国の大学が協定した第1号です。冷戦の時代にも愛知大学は少し中国との関係を持っていましたから、そういうこともいろいろ評価されたんだろうと思います。

サツマイモなんて書いてありますが、食料難の時代この豊橋地域ではサツマイモが教員や学生諸君を支えていました。これは学内のグラウンドになる前の広場で、左方が渥美線の駅のほうです。

向こうに今は学生のホールとかいろいろできていますが、こんなところを畑にしていたんじゃないでしょうか。

設立趣旨からいくとフンボルト大学（ベルリン大学）と非常によく似ているというふうに書いた酒井先生もおられます。愛知大学の設立趣旨の中に、1つは国際人の養成、それから地域社会への貢献というのがあります。6大都市以外に最初にできた旧制大学は愛知大学だけです。そういうわけで地域との繋がりという特色を出したわけです。今は日本中の大学が国際的な視点とか地域との連携とか盛んに言いますが、敗戦直後1946年の設立時にそういうことを言ったというのは、普通だったら考えられないことです。日本国内だけで作った大学ではそんな内容の設立目的は出てこないと思います。外地にあって国際的視点を持っていた書院をベースにしたからこそ、愛知大学の設立趣旨の2本立ての内容が成立したんだろうと思います。

愛知大学は今後もそういう設立趣意書をうまく生かした形で展開していく必要があります。愛知大学の設立趣意書は非常に先駆的で、本物であるというふうに我々も考えます。世の中の動きの中でそういう軸が揺らいだりしないように、設立の原点をいつも見ていくべきだろうと思いますし、地域の方々にもそういう大学だということを知っていただき、外側から見てちょっとおかしいじゃないかという時には「おかしい」と言っていたたく。あるいは「もっとこういう形でいったほうがいいんじゃないか」というご意見もいろいろいただいたほうが、地域の大学としてはいいんじゃないかなと思っております。

まだだいぶ資料がありますが、時間がオーバーしましたのでまたの機会にしまして、今日は大きな流れということで、ここまででお話は終了させていただきます。愛知大学の出自と言いますか生まれたきっかけと、愛知大学の今のありようがどこに起因しているのか、どこから来ているのかと

いうあたりをご理解いただけたなら幸いです。あと書院の各論に関しましては次週以降の回からそれぞれの方に順番にお話しただけるとお思います。もしご質問があればお答えしますが、とりあえずお話はこれで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございます。ちょっと時間が過ぎておりますけれども、ご質問があればお受けしたいと思えます。いかがでしょうか。

【質問者】 先ほどちょっと聞きもらしたんですけども、旅行の費用はどこが出したんですか。

【藤田】 最初は外務省のお金でやれたんですが、3年間で底をついてしまったので、あとは書院のほうで最低限の費用だけ出しました。だから学生諸君は大変です。例えば船で行く時はデッキ・パッセンジャーで、客室に入れないんです。デッキの一番上でしか行けない。つまりどういうことかと言うと、雨が降ると濡れるわけです。中国のお客さんもお金のない人はそういうところに乗っていましたから、彼等と一緒に各地を歩いたわけです。最少のお金しかありませんが、まあ学生のエネルギーがそれを上回っていたんでしょうか。家からも少し仕送りをしてもらったりしています。それから写真がたくさん残っていますが、これは学校側が各班にカメラ（ドイツ製のライカ）を1台ずつ提供したので、それで撮影しました。会計係は上海を出発する時にお金を持っていかなくちやいけません、通貨がバラバラですから、どこでも共通してお金に変えられるというので小さい銀の粒の固まりを、会計係が紐で結んで身体にグルグルに巻いて歩きました。重たくて大変です。強盗団に取られないようにいろいろノウハウが後輩に伝わっていて、船に乗る時は、川辺に近づくと強盗団が乗り移ってきて、身体に巻いていたらすぐ取られちゃうから、その紐の先を船べりの下の釘みたいところに引っかけて水中に垂らしながら行きなさいとか。なかなか大変です。

強盗団にばったり出会って命を失いそうになったこともあり、読んでいるとまさにアドベンチャーの、大変な旅行だったと思います。1つ言えるのは、当時の日本人のインテリの人達も中国へ行っていますが、みんな都市にしか行かなかつたので、都市のことしか知らないのです。それが中国だと思ってしまう。しかし彼等は大部分農村を歩き回っていますから、中国の農民の方々との交流が多かったのです。書院の人達は非常に中国を好きになった人が多いんですけれども、日本の当時の学生の方々はほとんど農村出身でしたから、書院の学生も農家の方々との接点があり、共通項が多かつたんじゃないでしょうか。都市だけを訪ねたインテリの人達とは違い、書院生達は中国の実態を身体で味わっていたというところがありますね。

【質問者】 現地の人から、通りかかっただけでも「ご飯を食べていきなさいよ」みたいなことがあつたんでしょうか。

【藤田】 なかなかそういう余裕のあるお宅はなかつたですけど、材料を農家の人達から安く買って、あるいはもらって、自分達で料理をする。鍋釜を提げての旅行です。今みたいなホテルはありませんから、自分達で全部やつた。卵が入手できたのは一番のご馳走だと書いてあります。肉などもなかなか買えなかつたようです。中国の人も食べていなかったのですから。とにかく5千人近くの書院生が旅行して、危険な目にたくさん遭っています。戦争の最中、軍閥同士の争いの中にも巻き込まれていますけれども、幸い命を落とした人はいませんでした。

お金のない貧乏旅行だからこそそういう経験をするチャンスがあつたんだと思います。お金があつていい旅館（田舎にはあまり旅館はないけれども）に泊まつたりするのではなく、寝るところは板の上で、南京虫が夜中にいっぱい出てきて、身体中が痒くてたまらないとか、今とはだいぶ違うと思いますがそういう記録が残っています。これも

貧乏旅行だから可能だったと思います。「お金がなかつた学校」、それが幸いしたかも知れません。

【質問者】 もう1点、直接関係ないかも知れませんが、荒尾さんという方が亡くなつたのが台湾だと書いてあります。どういう関係で台湾にいらしてたんでしょうか。

【藤田】 この方はけっこうあっちこっちへ出かけていって、自分の説を出張したりしています。台湾は日清戦争後植民地化されていきますから、おそらくそういう点で台湾にもいろんな関心を持っていたんじゃないでしょうか。近衛篤磨公も同じように早く亡くなつてしまうんですけどね。荒尾さんと近衛さんがもう少し長生きしていたら、まただいぶ違つた状況が書院、さらには日本全体にもみられたかも知れません。そんなことぐらいしかお答えできませんが。

【質問者】 ありがとうございます。

【司会】 まだまだご質問があるかと思いますがけれども、時間が過ぎてしまいましたのでこのあたりでご質問を終了させていただきたいと思います。藤田先生にもう1度拍手を。ありがとうございます。1点だけご案内をさせていただきます。お配りした資料にこの東亜同文書院大学の資料展示会のチラシが入っていたかと思います。お話の中にもありましたが、東亜同文書院大学記念センターでは毎年各地で展示会を開くことにしておりまして、今年は東京の霞が関で、愛知大学東京事務所の定期展ということも兼ねて展示会を開く予定でございます。東京での催しですので皆さん方おいでいただくことは難しいかと思いますが、機会がございましたら、またあちらにご用事等ございましたら、よろしく願いいたします。次回の講座は10月13日（土曜日）14時よりこの同じ教室で行ないますので、またお越しいただければと思います。それでは時間が過ぎてしまいましたけれども気を付けてお帰りいただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。